耳納山交歓

じのうさんこうかん

村田喜代子

耳納山交歓

村田喜代子

講談社

耳納山交歓

一九九一年六月一〇日　第一刷発行

著者――村田喜代子

© Kiyoko Murata 1991, Printed in Japan

発行者――野間佐和子

発行所――株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一二三―〇一

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六一二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所――株式会社精興社　製本所――株式会社黒岩大光堂

定価――一三〇〇円（本体一二六二円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-205167-2（文1）

目次

耳納山交歓　5
職安へ行った日　133
潜水夫　165

装画　堀　文子

装幀　大泉　拓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

村田喜代子作品集　耳納山交歓

耳納山交歓

1

耳納山は北に法師山、東に蛤山、西に鳥追山とつながった連山の中でも一番高い山である。標高千四百二十メートル。七越（耳取・草分・万地・水上・工物・下地・耳鳴）三峠（追耳・耳無・能図）に四方から囲まれた山塊だ。耳納山をはじめ地名に耳の字が多くもちいられているのは、昔から山中にキノコが豊富に採れたことからきているらしい。とくにキクラゲの群生は有名で、その―木耳―の文字に由来する山名だという話がある。

過去には幾つかの村も山中にあり、杉林の奥には炭焼小屋もだいぶあったが、時代の推移とともに若い者は山をおりて出て行き、残った年寄り達もしだいに少なくなり、あいだに何度かの木の伐採による山崩れなどが追い討ちをかけて戸数は減りつづけ、今では村と名のつくものはまったくなくなった。集落のあと地には廃屋の残骸や畑の名残りの石垣が

みられるだけである。

ところがこのさびしい山奥の廃村に宅地業者が入ってきて、一部の土地を整備し道を造り（舗装道路は村の中だけだが）電柱を立て、共有の井戸から簡易水道を引いて十四、五棟の小さなプレハブの家を建てた。むろんこんなへんぴな場所にふつうの家を建てても買い手はつかない。セカンドハウスとして売り出したのである。

村の入口に『耳納山ニュービレッジ』というしゃれた名前の看板が立ち、ぽつぽつ近隣の県から建物をみに人がやってくるようになった。手つかずの自然が売物であるだけの、ひと昔前なら誰もみむきもしないような深山の村で、別荘といっても金持相手のモダンな建物はない。休日やあるいは月の内の一定期間を都市からのがれて、仕事や休養の場所に使おうという人々が訪れ、半年くらいのうちに十軒ほどが売れていった。ほとんどが車で一、二時間の近隣の小都市圏に住んでいる人々だった。引越しがすむと、やがてそれらの家の車が耳納山を登ってくるようになった。ふもとの国道ぞいの村にちょっとした店もあり、野菜は農家から、卵は養鶏場からというぐあいに食料の調達はしやすい土地柄だった。

ただ難点はふもとから山の村へいたる道路の不備だった。杉の県有林が近くにあるのでいちおう舗装路は通っているが、車でも三十分以上はかかる。そしてわるいことにこの道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は地形的に常時霧がかかっていた。よく晴れた道を一つ曲るとその先は真白に霧の幕が垂れていたりする。山霧は水のように溜まりやすく、濃霧の場所とそうでない場所がある。深い所では手さぐりなのに、浅い所ではぐっしょり濡れた杉の太い幹が霧の中に透き垣のように奥へつづくのが幻想的にながめられた。

登山道はもう一本通っていた。こちらは山の東側から登るルートでたいてい霧もなく晴れている。しかし道幅は狭く谷ぞいに車の離合できない場所がたくさんあり、たまに行き合った対向車同士が、くっついてそろそろと移動する光景がみられた。この東の道路拡張工事がおこなわれないために、かえって新しくできた別荘村の平安は保たれていた。

村の北は渓流をみおろす高い断崖で行き止まりになっている。渓流を村から四キロほど登った所に、山中で唯一の名所のような滝がある。とどろ滝というが名前ほど凄くはなくて落差は七、八メートルくらい。滝幅は二メートルほどだが、滝壺は広く池のようになっている。底は深いらしく濃緑色の手の切れるような水をたたえていた。

さて新しい村の体裁はすこしずつ整っていったが、せっかく不動産業者のつけた『耳納山ニュービレッジ』という名称はハイカラすぎて滲透せず、いつのまにか新しい住人達は『キクラゲ村』と呼びはじめた。キクラゲ村とは昔、耳納山にあったという村の名前である。そしてながらく真暗闇だったその土地に、夜になると白い星のような人家の灯が点々

とともるようになった。蛍光燈の灯のこぼれる窓から、テレビの音などが低く流れて山の闇に溶けていった。

2

一番先に家を買ったのは、隣県に住む松田という若い陶芸家だった。土地開発が進んで窯場の近くまで新興団地が迫ってきたので、耳納山のニュービレッジのはずれに新しい窯をひらいた。本宅のほうは展示場にして、仕事と生活の本拠地はこちらへ移した。

彼の家は、村はずれの谷へおりる小道の脇にある。旧来通りのマキの窯を造り、家のおもてに『一専窯』の看板を出した。主人は三十五、六歳のがっしりした青年で、天気の良い日、戸外が白く日照るおもてから、工房のロクロで土をまとめる彼の太い腕がみえる。

草木染めのしゃれたモンペをはいた若い妻が、薄暗い屋内で素焼きの大皿を片手に持って、くるりくるりと回しながら釉（うわぐすり）の流しかけをやっている。長い髪を一つに束ねて背へ垂らしている。うつむいてしゃがみ、熱心に大皿を回しつづけている。

彼女はときどき皿を置いて、おもてへ出て行く。前の庭にはずらりと素焼の雑器が干してあり、乾いた土の色があたりをみょうににぎわせていた。彼女は日光が素焼の陶器の肌にまんべんなくあたるよう、むきを変えてまわる。一ヵ所に日が当りすぎると、形がくる

ってしまうので気をつかうのだ。

松田夫婦は一日黙々と工房で働いている。

3

一専窯から百メートルほどくだった村の中に、崖を背に由比六郎の家が建っていた。プレハブ造りの小さな家で、部屋は二室しかない。一つの部屋の窓の内では、痩せて貧相な由比老人が熱心にピアノをひいていた。横に小卓が置いてあり紙がひろげられている。老人は一小節ひいては手を止め、紙になにか書きこんでいた。

彼はもと高校の音楽教師で停年退職後、それまでこつこつとやっていた研究をまとめるために、家を出てこの別荘村へ移り住んだ。机上には書きためた原稿の束が置いてあり、表紙に黒インキの太い字で、

『音階とハーモニー・音の構造論』

と書かれてある。これが老人の余生をかけた仕事のテーマだった。

部屋の天井には彼の作った気の遠くなるようなジグソーパズルの完成版がびっしりとはめこまれ、壁面にはナントカ星雲と書いた文字もかすれた、これも老人手作りの天体図が貼ってある。趣味と個人的研究に半生を費したような人物だった。

隣りの部屋では由比老人の妻が、テレビのローカル番組で高校野球の地方予選試合を熱心にみていた。まだ五十代のはじめくらいで、夫とは年が離れている。あるいは由比六郎が老けすぎてみえるのかもしれない。……由比はな子は野球観戦が趣味である。地元高校が出場する場面になるとおもわず正座をしてしまう。

近視の眼鏡のずり落ちるのを手の指で押し上げ、テレビの前にしゃちこばって座っている。プロ野球では西武のファンだが、昔からひいきの球団に関わりなく試合があると近くの球場へ出かけて行くたちだった。根っからの野球好きというよりも、彼女の場合は球場の観客の生態観察のほうに興味がある。敗戦チームを応援しているファンの姿などをみていると、はな子はいつのまにか試合の経過よりその哀感にうたれて胸が熱くなってくる。

夫の創作研究生活の伴をして山に住むようになったので、いまはもっぱらテレビの野球中継専門である。

野球の試合が終ると、はな子は庭へ日よけ帽子をかぶっておりる。裏へ行って生ゴミのポリ袋をあけて土に埋める。小さな菜園の堆肥を作るのだ。それからおもてへまわり菜園の虫取りをする。キュウリとナスが小さいながら育ちはじめている。収穫したら近所の家へ分けてやろうとおもって、手入れに熱心である。

菜園の手入れがすむと家へもどり、夕食の仕度には時間がまだあるので本をひらいて横

になった。はな子はこの年代の女性にしては読書量は多いほうだ。雨の日など半日読書にふけっている。野球と読書はごく自然にはな子の中に折り合っている。若いときのはな子の夢は、大恋愛小説をいつか書きあげることだったが、まず読むほうに専念しているうちに年月がたってしまった。

横になっているはな子の背の上を、隣室から響くピアノの音色が、あるときは優しく、あるときは激しく流れて行く。はな子はその音を聴きながらだんだん瞼が重くなってくる。はな子にとって山の一日はつくづくながいのだ。

4

由比家からすこし道をくだった崖のそばに、長田公平という絵かきの家が越してきた。主人は五十代後半くらいで、痩せて小柄で口ひげをはやしているが、ひげも頭髪もまだしらがは混じってなく真黒である。その髪もひげも手入れをしてなくて、いつもぼさぼさのままだった。この男も仕事場の目的で別荘を買った組で、本宅は車で一時間半くらいのY市にあるが、ずっとこちらで生活している。

運動靴をはき、くたびれた半袖のシャツを着て、スケッチブックを持って毎日林を歩いている。最近までY市の画家連盟の会長をしていたらしいが、現在は後進にあとをゆずっ

て自由の身になった。絵かきにときどきみられるような奇矯な振舞はまったくなく、温和で静かな人物だ。道で誰かに出会ってもにこにこと会釈をする。キクラゲ村の住人の中では、一番まじめでクセのない男かもしれない。

週末には車でY市の家に帰り妻をつれてくる。妻はエプロンをかけて一日アトリエの大掃除に精を出す。妻もとくに変ったところはない。小学校の教師を長くやっている温和しい女だ。

ある日、彼女は林へ行っててのひら一杯のキクラゲを採ってきた。絵かきもまだ採りたてのキクラゲをみたことがなかったので、さっそくスケッチをした。紫褐色のぶよぶよしたのを二片テーブルに置いて描いた。木耳と書くが人間の耳のかんじではない。色も形もみょうにグロテスクだ。

「紫木蓮の花があるだろう」

と絵かきが妻に言う。

「あれみると、ネコの舌をおもいだすんだ。よくないことをしゃべる舌みたいだろ」

ホホホと妻が笑う。

「キクラゲはそれからいくと、よくないことを聞く耳ってかんじがするね。ほら、サルの耳みたいだろ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com